

3年目の仮設 ～より良き暮らしのために～

旧大槌町役場保存 記憶を風化させず、後世に残す

旧大槌町役場庁舎を震災遺構として保存すべきか、それとも解体すべきかを検討してきた町は、旧役場庁舎の正面部分を一部保存する方針を決め、碓川豊町長が3月28日の記者会見で発表しました。論議が二分する中、震災の記憶を風化させず、後世に伝えようとする道を選択しました。

保存する方法は、旧庁舎の時計を含む正面玄関付近の部分を屋上まで切り取り、補強工事を施します。保存のための調査、整備費用は国の復興交付金があるように、国に要望していきます。

碓川町長は、記者会見で、方針決定について、「二度と同じ悲劇を繰り返さないためには、災害の記憶を風化させないようにするとともに、防災教育の充実を図ることが必要です。犠牲者の方々は、残された家族や子孫、町民の安全を願っているものと考えています。こうした犠牲者の方々の思いを後世に受け継いでいく象徴的な場所の一つとして位置付けています。今回の震災は、被災地だけではなく、わが国全体で分かち合うべきもので、その遺構についても、被災地住民だけでなく国民全体の財産と捉えるべきものです」と語りました。

さらに町長は、町民の皆さまに向けたメッセージを発表しました。

【町民の皆さまへのメッセージ】
町民の皆さまにおかれましては、検討委員会の開催過程におきまして、様々なご意見、ご提言を頂戴し、大変ありがとうございました。いただいたご意見なども参考に熟慮を重ねた結果、一部保存という方針決定に至りました。

町民の皆さまからは、保存することへのご懸念の声を多く頂戴いたしました。しかしながら、当町は、明治29年の明治三陸津波、昭和8年の昭和三陸津波及び昭和35年のチリ地震津波により、多くの町民の方々が幾度となく犠牲となったにも関わらず、今回の震災で、さらに多くの町民の方々が犠牲になりました。

私は、こうした教訓を後世にしっかりと伝え、将来、町民の方々が二度と同じ悲劇を味わうことがないようにすることが行政を預かる者としての責務ではないかと考え、苦渋の決断をいたしました。

今後、議会、国をはじめとする関係機関とも相談のうえ、一部保存に向け取り組んで参りますので、ご理解、ご協力を賜りますようお願いいたします。



家庭菜園で深まる絆 ～蕨打直仮設団地～

大槌町蕨打直地区の「蕨打直仮設団地」(43世帯、99人、2月末現在)では、住民たちが、今年から家庭菜園作りに取り組み始めました。

菜園の広さは約70平方メートル。団地の談話室のすぐ横にあります。うねづくりを終えたばかりの菜園は、土が黒々として、おいしい野菜ができそうです。菜園は6区画。6世帯の人が、ネギや大根、白菜、カボチャなどを植えて楽しむ予定です。

菜園は地元の持ち主から4月に、無償で貸与を受けました。団地の代表の野沢文雄さん(68)が、住民同士の絆を深め



ようと、菜園作りを提案し、持ち主と交渉。たまたま、持ち主の方が体調を崩していたため、借り受けることが出来ました。代表の野沢さんは「無事に作物が収穫できるようになったら収穫祭をやりたい。畑で採れた野菜を調理して食べる機会が設けられれば」と語りました。

と、周囲から助け舟が出て、16の食べ物が出そろいました。最後は全員で「花は咲くと」と「大槌町民歌」を合唱しました。「真っ白な雪道に 春風香る」…。「花は咲く」を歌いながら、涙を流すお年寄りもいました。

歌って体を動かして ～柵内仮設団地～

大槌町柵内地区の「大槌仮設団地」(39世帯、118人、2月末現在)では、住民が、毎日、体操をし、しり取り遊びをし、歌を歌って元気を出しています。

4月12日午前9時過ぎ、住民が、三々五々、談話室に集まってきました。支援員の佐々木章夫さん(63)を含めて16人。佐々木さんの掛け声で、ストレッチが始まりました。約10分間、体を動かし、締めくくりに、皆で肩をたたき合いました。

続いて、しり取り遊び。出された課題は食べ物。「麦飯」「シジミ」「味噌」「ソラマメ」「明太子」などと続きました。わからなくなる



旧役場庁舎の保存問題については、2012年10月に学識経験者や職員遺族ら11人からなる、「大槌町旧役場庁舎検討委員会」(委員長・豊島正幸若手県立大学総合政策学部長)が設置され、論議がなされてきました。委員会は、次のような報告書をまとめ、今年3月15日(金)に委員長が町長に提出しました。

【報告書の概要】

◆提言1 震災犠牲者の鎮魂の場の設定

保存また解体いかにかわらず、震災犠牲者の鎮魂を行う場は何らかの形で必要。

◆提言2 後世への伝承・防災教育

保存または解体いかにかわらず、伝承、防災教育を重視し、災害の記憶を風化させない取り組みが必要。後世に伝えるにあたっては、「もの(建物)」や「場所」に付随した「物語」が重要であることから、この点を踏まえた伝承、防災教育を行うことが望ましい。

◆提言3 町の歴史を踏まえた公園として利用

旧役場庁舎は、昭和29年に建設され、以来、昭和から平成にかけて半世紀以上にわたり町の歴史を築き上げてきた場所。保存または解体いかにかわらず、旧役場庁舎周辺は公園を整備することが望ましいとの意見で一致。中心市街地としての再生を計画している、隣接地の御社地エリアとつながり、老若男女が利用できる公園を整備することが望ましい。

町長随想

①城山に思う

春の陽気に誘われ、メタボ解消のため昼食時に城山まで歩きはじめた。途中、いろんな光景が目に入ってくる。

中央公民館の入り口には、海づくり大会で天皇陛下がお詠みになられた御製が置かれている。津波で流出したが、運よく損傷が少なく見つかった。浜菊の花言葉のように、逆境に耐えて、周囲の景色と馴染み町民を励ましている。

「1・17希望の灯り」の場所からは、大槌湾を眼下に、犠牲者の霊を鎮めるように桜の花びらが春風に揺れながら散り始めている。ひよっこりひよったん島の歌詞、「苦しいこともあるだろうさ…」を思い浮かべながら、残された町民の幸せを願わずにはいれない。

全国から、大槌町の再生のため応援職員が派遣されている。新年度が始まり1ヵ月。慣れない環境の中、懸命に業務をこなしている。単身の生活を心配されて、ご家族から食料や日用品雑貨等の宅急便が届くと聞く。

一方、3月末、全国の自治体に戻られた職員には、岩手のニュースや天気予報に町の復興が気になっていると思う。

ニュースと言えは、最近、頻発する地震が心配だ。欧米では、満月の夜には、地震が起きる確率が高いとされ、その夜は、家族で過ごすと聞く。科学的な根拠は、ともかくとして日頃から、防災の備えについて、家族と話す機会が増えることは意義深い。

せめて日頃から、健康保持のため、散歩し足腰を鍛えておきたい。今年のチャレンジデビューは、一人でも多くの参加を望みたいものだ。

(碓川 豊)